

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成28年度病虫害発生予報第5号(8月)について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

予報第5号

8月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

主な病虫害の発生予報概要

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稻	いもち病(葉いもち)	やや少	並	少
	セジロウンカ	少	少	並
	トビイロウンカ	少	やや少	多
	コブノメイガ	少	少	少
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	並
カンキツ	黒点病	やや少	並	やや多
	ミカンハダニ	少	少	並
ナシ	ナシヒメシンクイ	並	並	やや多
カキ	炭疽病	やや少	並	やや多
	フジコナカイガラムシ	並	並	少
果樹共通	チャバネアオカメムシ	やや多	—	やや多
茶	炭疽病	少	やや少	少
	カンザワハダニ	並	並	並
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病	並	やや多	やや多
	ハダニ類	やや多	やや多	多

*果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいため前年比としている

作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年(福岡県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、**「少、やや少、並、やや多、多」の5段階**で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病虫害の発生条件を必要に応じて記載しています。それぞれの条件は、**少発生(－)**、**やや少発生(－～±)**、**並発生(±)**、**やや多発生(±～＋)**、**多発生(＋)**として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

<予想される向こう1か月の天候（平成28年7月30日～平成28年8月29日）>

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並か高く、2週目は平年並か低く、3～4週目は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並40 高40% 平年並か高い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

（福岡管区气象台 平成28年7月28日発表抜粋）

【普通作物—水稲】

普通期水稲

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年並、前年より少

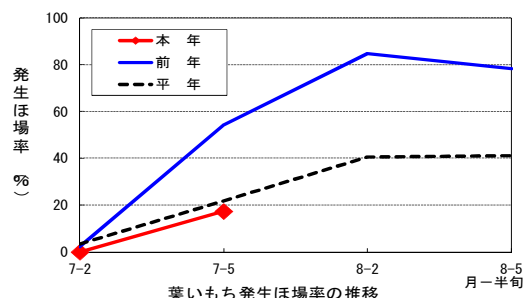
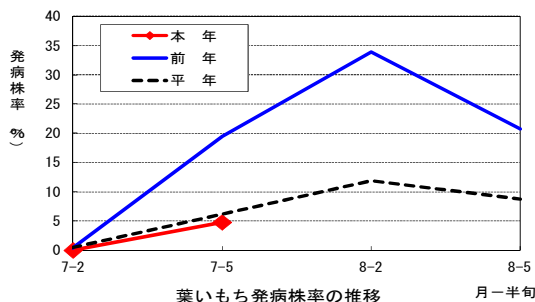
（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病株率 4.8%（平年 6.2%、前年 19.5%）

発生ほ場率 17.4%（平年 21.9%、前年 54.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



（3）防除上注意すべき事項

ア 発生状況は地域やほ場による差が大きく、多発ほ場が一部で認められており、地域やほ場によって発生状況が大きく異なっているため必ず本田での発生状況を確認する。

特に、育苗期に本病が発生した地域では注意する。

イ 本病原菌は孢子形成量が非常に多く、病斑数が少ない場合でも大量の孢子を飛散する。このため、葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、多発ほ場では穂肥を控えるのが望ましい。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、剤型によって散布時期が異なるので注意する。粉剤は出穂期前、粒剤は出穂期2週間前に処理する。

エ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

オ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

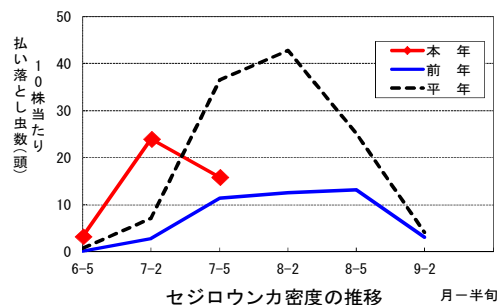
2 セジロウカ

（1）予報の内容

発生量：平年より少、前年並

（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。



10 株当たり払い落とし成幼虫数 15.9 頭 (平年 36.6 頭、前年 11.4 頭)
 発生ほ場率 80.0% (平年 83.3%、前年 84.4 %)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 飛来量は地域による差が大きく、主要飛来の時期も地域により異なる場合があるため、ほ場における発生状況の把握に努める。

イ 幼穂形成期～穂揃期に多発して吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少など、大きな被害が生じることがある。

発生状況を必ず確認して幼虫の発生密度が高い場合には、薬剤防除を実施する。

ウ 飼料用水稲では本種が増殖しやすいため、発生状況に注意する。

防除を実施する場合は、「稲発酵飼料生産・給与マニュアル」(稲発酵粗飼料推進協議会等編)、「多収米栽培マニュアル」(農林水産省)等に沿って行う。

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より多

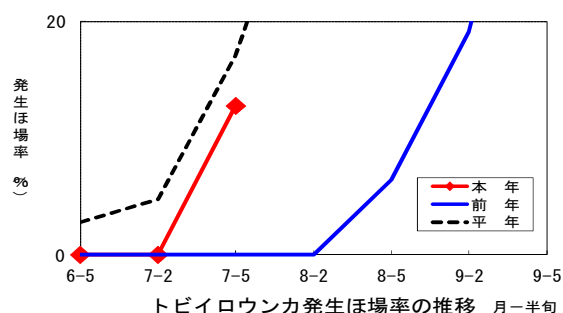
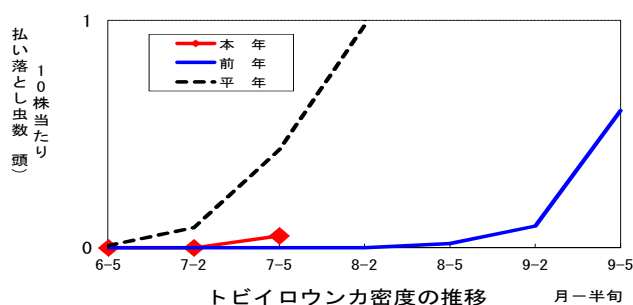
(2) 予報の根拠

ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(ー)。

10 株当たり払い落とし成幼虫数 0.05 頭 (平年 0.43 頭、前年 0 頭)

発生ほ場率 12.8% (平年 17.1%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 飛来量は地域による差が大きく、飛来の時期も地域により異なる場合があるため、ほ場における発生状況の把握に努める。

イ 発生初期には低密度でも急激に増加するため、発生パターン図を参考に、必ずほ場での発生状況を把握し、適期(若齢幼虫発生期)に防除を行う。

ウ 育苗箱施薬剤を施用した場合でも、移植後1か月以上経過した水田においてはウンカ類が増殖しやすいので、十分注意する。

エ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤が株元に十分かかるように丁寧に散布する。

オ 無人ヘリコプターによる防除を実施する場合は、気温が高くなる前の早朝や気温が下がった夕方に実施する。気温が高い時間帯に実施すると、薬剤の種類によってはイネの株元に到達する前に蒸発して防除効果が著しく低下することがある。

※要防除水準(中老齢幼虫合計値で示す)

飛来後第1世代：100株当たり	20頭以上(7月中～下旬頃)
飛来後第2世代：100株当たり	100頭以上(8月中～下旬頃)
飛来後第3世代：100株当たり	1,000頭以上(9月)

4 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

食害株率 0.01%（平年 4.2%、前年 1.3%）

発生ほ場率 4.3%（平年 34.7%、前年 17.4%）

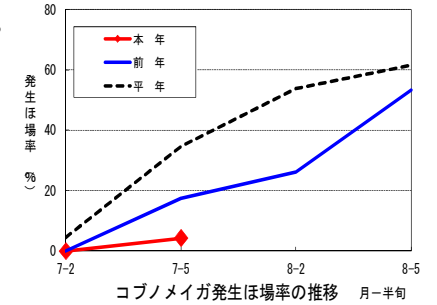
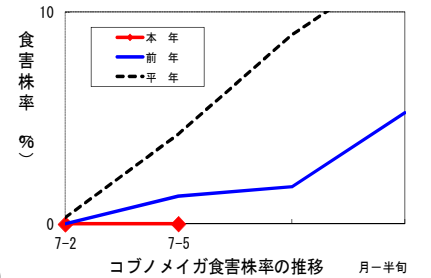
30㎡当たり払出し成虫数 0.04頭（平年0.30頭、前年0.02頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は、発蛾最盛期から1週間後である。

イ 本種はウンカ類と同時期に飛来していると考えられるので、発生パターン図を参考に防除を行う。



【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

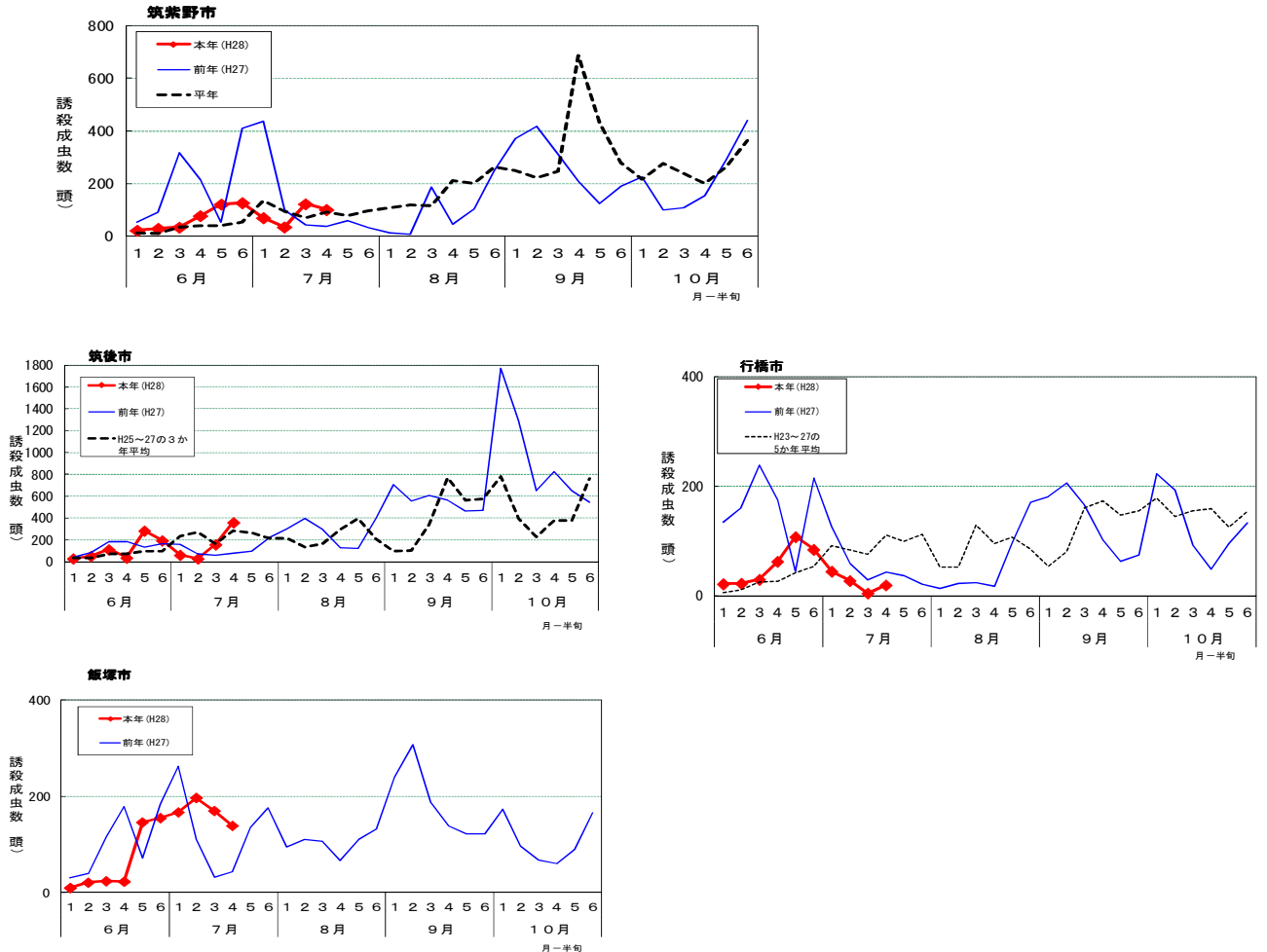
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～4半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、平年並であった（±）。

筑紫野市 333頭（平年 389頭、前年 618頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。
- イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認する。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

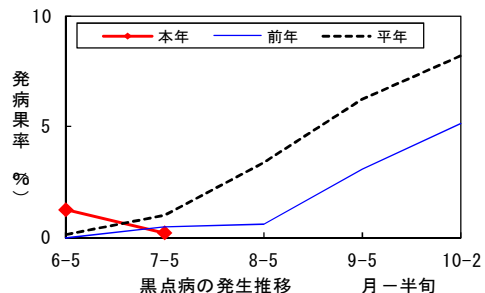
発病果率 0.2%（平年 1.0%、前年 0.5%）

発生ほ場率 30.0%（平年 32.7%、前年 30.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。
- イ 前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。
- ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

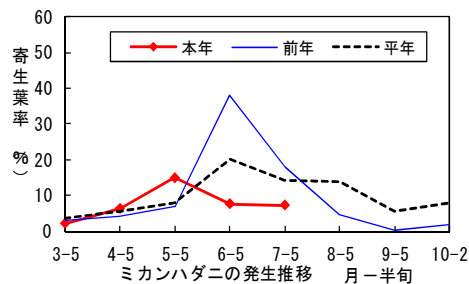
寄生葉率 7.4%（平年 14.4%、前年 17.9%）

発生ほ場率 50.0%（平年 66.9%、前年 81.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
- イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

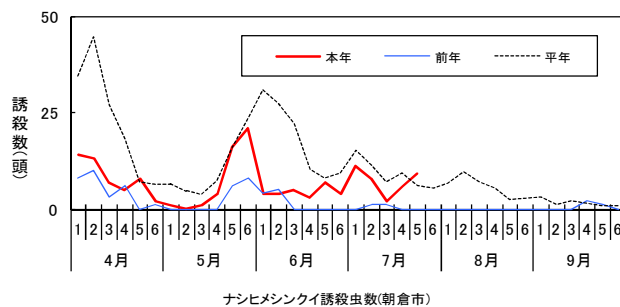
発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

7月1半旬～7月5半旬のフェロモントラップの誘殺虫数は、36頭（平年 48頭、前年 2頭）（地点名：朝倉市杷木町）で平年並であった（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月上旬～中旬頃の発蛾最盛期に防除を行うが、防除後も成虫が多くみられる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除にあたっては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病枝率 0.1%（平年 0.5%、前年 0%）

発生ほ場率 8.3%（平年 21.3%、前年 0%）

発病果率 0.2%（平年 0.2%、前年 0%）

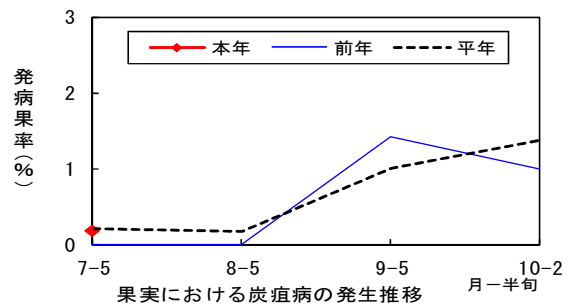
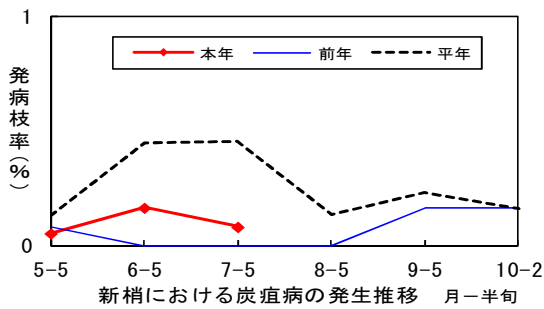
発生ほ場率 8.3%（平年 14.4%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 連続降雨があった場合や前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生果率 7.0%（平年 8.2%、前年 10.3%）

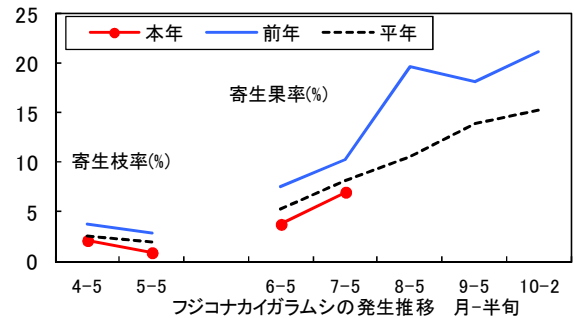
発生ほ場率 83.3%（平年 82.5%、前年 100%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理し散布むらがないよう丁寧に散布する。

イ 防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病虫害・雑草防除の手引き』を参考にしてください。URL：http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/203227_51694561_misc.pdf



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多、前々年より少

以下平成28年7月28日28農林試第2136号技術情報第7号参照。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
なし ハダニ類	少	少	やや少	・多発すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に徹底防除する。
かき カキノヘタムシガ	並	並	並	・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。 ・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかりムラがないよう十分量を丁寧に散布する。 ・ハマキムシ類の発生が多い園では、8月上旬～中旬の防除を徹底する。
ハマキムシ類	並	並	並	

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

発病葉数 0.4葉 (平年1.8葉、前年0.7葉)

発生ほ場率 37.5% (平年30.6%、前年40.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

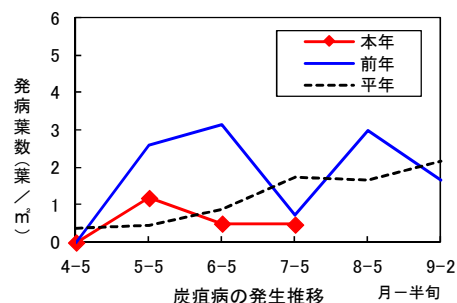
(3) 防除上注意すべき事項

ア 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 0% (平年0.3%、前年0%)

50葉当たり寄生虫数0頭 (平年0.4頭、前年0頭)

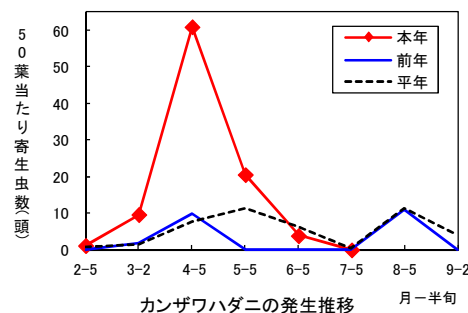
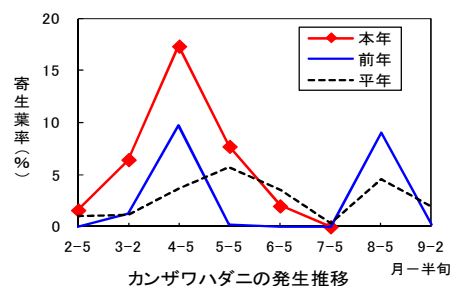
発生ほ場率 0% (平年8.5%、前年0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、摘採後、多発する前に速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少	並	・発生状況に注意し、たたき落とし（B5判上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。 ・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
チャノミドリヒメヨコバイ	少	少	並	・発生状況に注意し、たたき落とし（B5判上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。 ・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
チャノコカクモンハマキ	少	少	やや少	・第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬～8月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャノホソガ	やや少	やや少	並	・第3世代成虫の発蛾最盛期は、8月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャトゲコナジラミ	並	並	並	・チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は若齢幼虫発生期で、親世代成虫の発生が収まった頃である。配信される技術情報や茶園での成虫の発生状況に注意して防除に努める。 ・幼虫は葉裏に寄生しているため、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。

【野菜：冬春イチゴ（育苗期）】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

以下平成28年8月1日28農林試第1644号技術情報第8号参照。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

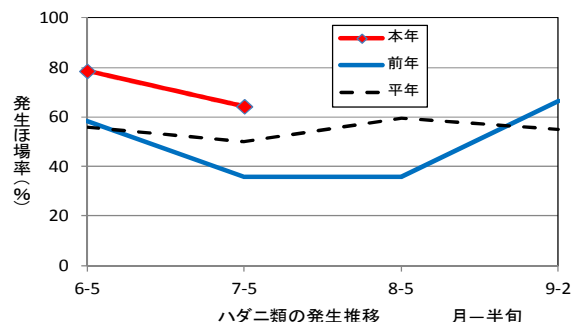
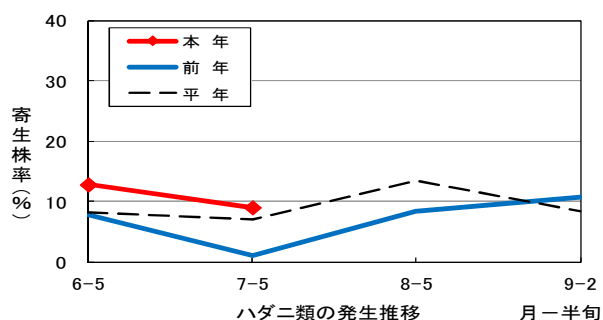
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

寄生株率 9.1%（平年 7.2%、前年 1.1%）

発生ほ場率 64.3%（平年 50.0%、前年 35.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。
- ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。
- エ 抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。
また、葉裏に農薬が付着するよう、下葉かぎ後に防除を行う。
- オ 天敵への影響が大きい有機リン系薬剤や合成ピレスロイド系薬剤の多用は避ける。
- カ 夜冷短日や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、本ぼにハダニを持ち込まないようにする。
- キ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	前年比	平年比	前年比	
野菜共通 コナジラミ類	多	—	やや多	・野外に設置したトマト苗トラップによる捕獲数は前年よりも多かった。 ・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと。

※現調査地点での調査は前々年からの実施のため、平年比はなし。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しました。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



福岡県病害虫防除所